

# ミナミアオカメムシ の生態と防除



稲穂に群がる幼虫

ミナミアオカメムシはもともと熱帯系の昆虫で、世界各地の暖かい地域にのみ分布していました。日本では九州南部や四国南部、紀伊半島南部などに生息が限られていましたが、近年、温暖化にともなって生息地域が拡大しています。本県では平成20年に初めて発生が確認され、水稻や大豆などを加害して問題となっています。



成虫

成虫写真：香川県中讃農業改良普及センター提供



カメムシ類の吸汁による斑点米



精米後

水稻では成虫、幼虫が開花直後から収穫期までの全期間を通じて加害します。1頭あたりの斑点米を作り出す能力は、カメムシ類の中で最も高いとされています。米の検査規格では、斑点米率が0.1%を超えると2等、0.3%を超えると3等、0.7%を超えると規格外となります。

精米後写真：香川県西讃農業改良普及センター提供

## 形態と発育



卵塊(1、2)：60~100個の卵塊で、水稻の葉裏などに産下されます。

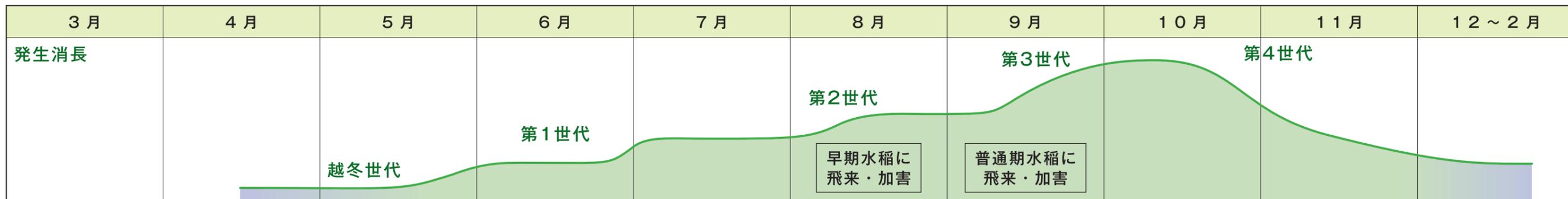
幼虫(3~5)：幼虫の体色は主に暗褐色で、最初は集団で生活します。

幼虫(6、7)：幼虫が大きくなると、徐々に黄緑色に変わります。

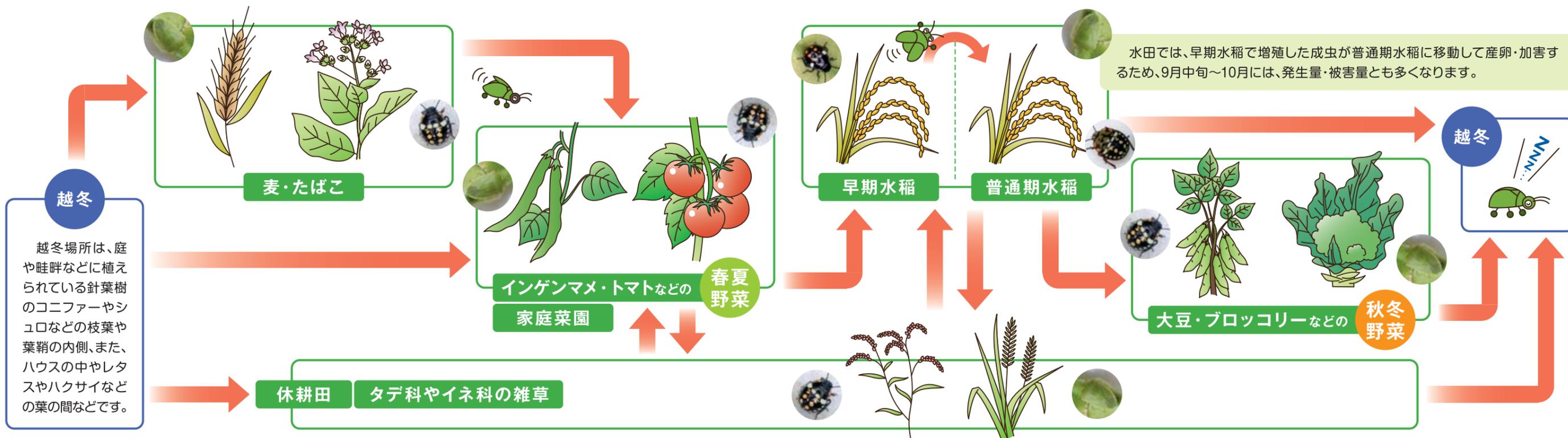
成虫(8、9)：卵から約30日で、緑色の成虫になります。一部には白色帯型などの色の違いが見られます。

## 生活環

成虫は4月に暖くなると活動を開始し、下図のとおり麦やインゲンマメなどの春野菜、またタデ科やイネ科の雑草に順次飛来して産卵・増殖します。そして、新しく生まれた成虫は、7月になると早期水稻へ移動して加害を始めるという経過をたどり、さらに普通期水稻や大豆や野菜などで秋まで増殖します。



早期水稻での虫数を減らすことが、普通期水稻以降の被害を減少させます。普通期水稻の防除で虫数を減らすことで、越冬虫数を少なくすることができます(水稻の作期ごとに適期防除を実施しましょう。)



# 防除について

1

## 水稻での防除時期

水稻では成虫が出穂期頃に侵入して、穂を加害したり産卵したりします。そして、発生量が増加するのは、出穂後10~20日頃からで、この時期に主に幼虫の吸汁によって斑点米ができると考えられます(図1)。

このため、防除は①出穂期頃と、②出穂の10~15日後が適当です。ミナミアオカメムシ以外のカメムシもいますので、①の時期に防除し、その後も普通期水稻やミナミアオカメムシが発生しているほ場(表紙の群がる幼虫の写真等を参考に)では、②の時期にも防除しましょう。

なお、カメムシ類対象の粒剤を出穂前に施用した場合は、②の時期を7日程度早めて施用するようにします。



図1 水稻の出穂前後におけるミナミアオカメムシ発生量の推移 (平成21年)

2

## 水稻での防除薬剤

ミナミアオカメムシに対する殺虫剤の効果については、MR.ジョーカーEW以外の薬剤では、いずれも高い殺虫効果が認められました。また、幼虫に対しても同様の効果が認められました(図2)。

なお、農薬を使用するにあたっては、ラベルに書かれている使用基準等をよく読んで安全に使用しましょう。

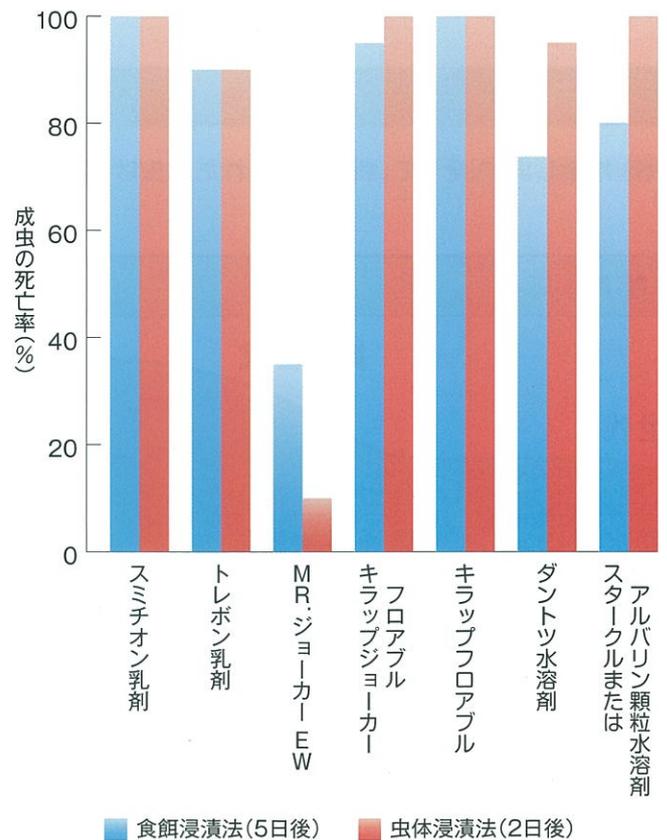


図2 ミナミアオカメムシ成虫に対する薬剤の効果 (平成21年)

3

## 大豆、野菜等の防除

ミナミアオカメムシは水稻のほか、豆類や野菜、果樹も加害することがあります。

特に、水稻を収穫した後に、周辺の作物に移動して被害が拡大することがあります。発生状況に注意して、各作物のカメムシ類に登録のある薬剤を用いて速やかに防除しましょう。

4

## 耕種防除

地域全体でカメムシ類の密度を下げるためには、発生源を含めた広範囲にわたる一斉防除が重要です。

休耕田や畦畔の雑草を出穂10日前までに処理するとともに、早期水稻の収穫後に「ひこばえ」が発生した場合は、稲穂でカメムシ類が増殖するので穂が出るまでに早めにすき込みましょう。